

2018年3月16日（金）日大WS「美的経験、再考！」

居住者・観光者の疎外——環境美学からの美的経験論再考

青田 麻未

mamiaota@gmail.com

## 0. はじめに

・本発表の目的は、環境美学において正当に注目を集めてこなかった居住者や観光者の美的経験の内実について掘り下げること、美的経験の多様性について考えることにある。個別の立場からの環境における美的経験を具体例として検討することで、美的経験についての一般理論に対していくらかの示唆を与えることが期待できる。

・とくに本発表を通じて再考されるのは、①美的経験の対象とはなにかという問題と、②美的経験と美的判断はどのような関係を結びえるのかという問題の2つである。

### ※用語の確認

- ・美的経験：感性（と何かほかの能力・要素）を通しての認識
- ・美的判断：美的経験を基にして下される価値評価
- ・環境：本発表で環境というときには、自然のみならず人が居住する場所も含め、われわれを取り囲むものを指す。
- ・環境美学：1970年前後ごろ英語圏において、美学における自然美の無視と、社会における環境保護論の高揚とを背景に、まずは自然美の経験とはいかなるものかを説明するために興隆した分野。その後、議論対象は人間が活動する環境にまで拡大。さらに2000年ごろから、環境に限らず日常的な事物・活動（芸術ではないものほぼすべて）を対象とする日常美学と呼ばれる分野も出てきた。

## 2. 観光者の美的経験

### 2.1 前提と批判

・観光とはさまざまな様態をとるものであり、観光者の美的経験について考えるまえに、そもそも観光とはなにかということ自体、考える余地のあるトピックである（ただしそこを本発表で扱う余裕はないので、以下ではわたしが一般的である、と考える観光観に頼らざるを得ない）。環境美学においては、居住者同様、観光者の美的経験についても多くは語られていないが、大衆的な観光を想定したうえで観光者の美的経験に対して批判的な言及が散在している。

・環境美学において観光者の美的経験が否定的に言及されるのみで、主要な考察対象にならなかったのは、環境美学の興りが環境保護論と密接に結びついていたからだろう。環境美学

の先駆者とされる Hepburn がトレーラー車によるキャンプや、ドライブしながら自然を観るような経験を疑問視していることから始まり(Hepburn [1966])、概して観光者は環境を浅薄な仕方ではしか見ておらず、このような観光者の態度が環境破壊に結びついていくのだ、という批判意識が強い。

・だから環境美学における観光者の美的経験批判は、美学からある程度離れたところで特定の態度に肩入れしている可能性がある、ということを差し引いて見られなければならないだろう。しかし、ひとまずのところ、そうした観光者の美的経験批判を出発点とすることで、本発表の考察を深めていくことができる。

・観光者の美的経験に対する批判は、大別して次の2つの観点がある。

① 〈対象の形式のみに注目している〉

たとえば Carlson [2009]は、観光者のような一時滞在者は、環境を風景に還元し、その「光景 scene」としての側面しか見てないと批判する。それは環境に形式的性質 formal qualities のみを賞賛する態度であり、ピクチャレスクの伝統に連なるもの。

② 〈クリシェ的な美的判断を追認している〉

美学の文脈を離れてみても、観光者に対する批判的意識は根強い。このような意識の背景にあるのは、観光者は大衆的であるという前提。ただみんながよいと思ったものを賞賛しているのみ。①で言及したピクチャレスクの伝統も、他者が示した規範を追従しているだけ。

・以下では、それぞれの批判を検討し、応答する。

## 2.2 〈対象の形式のみに注目している〉

・観光者の美的経験を「浅い経験」と批判する背景には、美的経験とは対象の持つ形式のみならず、その背後にある内容を理解し、形式と内容を合わせて解釈する営みのことだ、という美的経験に対する理解がある。たとえば、美しい砂浜を見て快を感じる時、その快の源泉となっているのは海のきらめきや波の音など、対象の（広い意味での）形式が持つ性質である。観光者は、だいたいこのように形式のみをソースとする美的経験をしている、と想定されているのだ。

・たしかに、絶景スポットは観光の目玉のひとつだし、われわれは多くの場合、実際にある土地や建造物を「見たい」という思いで観光に行く。しかし、形式のみをみている、という理解は観光を矮小化している。たとえば、観光に関する美学研究の唯一といってよい先行研究のなかで、津上英輔は「写真撮影」「料理」「ショッピング」「消費」という4つの観光に

含まれる場面のなかで、対象の形式とその他の要素（想像力、知識など）が合わさって美的経験を形成するさまを論じている（津上[2010], pp. 163-171.）。つまり、形式ではない諸要素が、形式に対して内容を与えている。

・観光を構成する種々の出来事というよりも、より環境そのものを源泉とする美的経験について考えてみると、形式に対してどのような内容が与えられうるだろうか。

知識型：観光に行く前に、あるいは観光の最中に、観光地にかんする地理的、歴史的知識を身につけることで、物の見え方が変わることがある。これはごく一般的だろう。これを狙ってか、名所にはだいたい土地を説明する看板が立っている。またわれわれはよく、慌ただしい観光旅行の始まりに、「まずい、ミュンヘンについてなにも調べてこなかった」と言いつつ飛行機の機内で慌ててミュンヘンの歴史を学ぶ、などをするが、これは観光に行き形式だけ眺めていても楽しめないで、内容を入れなければ、という努力のひとつ。

イメージ投影型：映画のロケ地めぐりや、近年話題になっているアニメの「聖地巡礼」。こうしたタイプの観光は、否定的な目で見られやすい。たとえば一昨年、「君の名は。」のポスターに使われた四谷の須賀神社に人が殺到したという話などは、冷ややかな目で見られた。確かに「聖地巡礼」者のマナーなど、倫理的な問題があることは否定できない。しかしアニメがどのくらいの再現度を持っているのかを子細に観察することで、街並みのほうにもより注意を払うということがありうる。イメージを重ねたことで、アニメや映画の世界のなかだ、という内容が与えられつつも、重ねたイメージとのズレにも注意を向けることができる。

文脈化型：「東欧、歴史とロマンの旅 7泊8日」のように、点同士である観光地を結びつける線となる文脈が与えられるケース。ひとつの文脈のなかに置かれることで、個々の観光地に対する感じ方も変化する。

※これらがすべて「適切な」美的経験と呼べるかどうかは、適切さの基準をどのように設定するかによって依存している。環境美学にはさまざまな立場があり、それぞれの立場で適切さの基準は違う。本発表ではその基準について検討する余裕はないので、別の機会に譲る。しかし、環境の美的経験は、芸術の美的経験よりも多様であってよい、とわたし自身は考えている。そもそも、居住者・観光者と類型に分けて環境の美的経験を考えようとするのもその態度の現れ。環境においては、そもそも美的経験の対象が不明確であることはすでに指摘した。対象の選定が多様であるなら、美的経験そのものも多様になるはず。

### 2.3 〈クリシェ的な美的判断をしている〉

・ガイドブックなどの評判をもとに、話題のスポットに行き、ただそこでカメラを構えて「きれい」とつぶやく——この一連の流れにおいて、観光者はなんらかの快を感じているかもしれないが、それは美的な快ではない。デモンストレーション効果のように、要は「みんながいいと思っているところにじぶんもきた」ことに伴う快である。

・すなわち、観光者は観光地に対して「きれい」などなんらかの美的判断をしていると思われるが、極端な場合にはこの判断のベースとなっているはずの美的経験が存在しない、ということになる。これが〈クリシェ的な美的判断をしている〉という批判が想定している事態である。

・たしかにそのようなケースもありえるだろう。しかしここでそもそも、観光にかかわる美的判断はどの時点で行われるのか、ということを考えてみることには意味があるだろう。観光に行こうと決め、実際に観光をし終えるあいだに、われわれは何度か美的判断をすることになるのではないか。

①どこに観光に行くのかを決める際の美的判断：多くの人は、ふだんなんらかのやるべきことを抱えているため、観光に割くことのできる時間は限られている。すると休暇のような旅行に行けるチャンスが訪れる際には、どこに行くのかをそれなりに真剣に選ぶことになる。その際、ガイドブックやインターネットを参考にして、他者の美的判断や、画像ないし動画を対象として自分でした美的判断を、比較検討する。この時点では、基本的には他者の証言に頼るしかない。

※この段階で、よくあるガイドブックには頼らない！という強い信念を持っているひともいるだろう。そこでたとえば、まったく人の証言には頼らないという人も出てくるだろうし、あるいは「別視点ガイド」系のサイトや、作家のエッセイなら見てみる、というような人もいるだろう（つまり大衆的な美的判断には頼らないで、自分が「理想的鑑賞者」のようなものだと認定する人の美的判断には頼る態度）。とはいえ多くの場合、種類のちがいはあれども観光前のわれわれはやはり誰かの美的判断に頼ることが多い。

②観光中の美的判断：①の段階で他者の美的判断を参考にしつつ、行き先を選択していた。そのため、実際の観光中に、①段階で形成された当の観光地への期待を充足させたい、と思うのは自然なことであるし、これがクリシェ的な美的判断の追認にみえる部分。しかし、実際にはわれわれはよく、不測の事態などによって計画通りに観光が進まないという事態に直面するし、あるいはそもそも、あえてガイドブックには載っていない場所へ行きたいと思ったりする。そしてそこで見聞きしたり、触れたりした自分の経験をもとに、われわれは自

分で美的判断を下す。友人や家族とともに観光をしていれば、その場で議論することもあるだろうし、一人旅の成果を SNS などにつづることもあるだろう。

※このような不測の事態を楽しむ、というケースがよく起こるということは、2.2 において形式と内容の関係で列挙した知識型などなどの型に還元されない観光中の美的経験があるということであり、そのことは本発表も積極的に認める。

③観光後の、あるいは次の観光につながる美的判断：生涯にたった一度の観光を楽しむ、というケースがあることはもちろん否定しないが、われわれの多くは何度も観光者になる。次の休暇にはどこに行こうか、とすでに観光旅行の帰路で家族と話し合った経験があるひとは多いだろう。たとえば横浜の次に神戸に観光に行けば、低地の中華街、山の上の洋館など、港町ゆえの類似に目を向けつつ、地形の微妙な差異に敏感に気づくというようなことがあるかもしれない。つまりわれわれは観光経験を重ねることで、今回の美的判断から次回の美的判断へ影響を与えることができる。これは芸術鑑賞でもふつうに起こっていることである。観光でも、一回の美的判断を取り出せば大衆的な美的判断への追随しかしていないひとでも、大局的に見ればそれを土台として自分の美的判断を洗練させていくことができる。

※さらに、観光中の美的判断が、日常に影響を与えるケースもある。観光から日常生活に戻ったと、隅田川を歩いているとシカゴ川が思い起こされ、隅田川の見え方が変わる、など。

## 2. 居住者の美的経験

### 2.1 前提と批判の要点

・はじめに明確化すべきなのは、ここで言う「居住」とはいかなるレベルの事柄を指しているのかということ。日本語では「住む」と一言で言われることが、英米圏の環境美学においては *live, inhabit, reside, dwell* など多様な言葉で語られる。そのひとつひとつのニュアンスを検討することはここではできないが、*dwell* という意味での「住む」はしばしばハイデガー哲学と結びつけられる (Cf. Haapala [2005])。このような、世界のうちに住まう、というような大きな意味での住む、ということは本稿では扱わない。問題にするのは、「桜上水に住む」「京都に住む」など、ある特定の土地に居を構えるという意味での「住む」。

・環境美学／日常美学における、居住者の美的経験への肯定的言及

①F. E. Sparshott→Allen Carlson：Sparshott は、居住者 *resident* と一時滞在者 *transient* を比較しながら、後者が環境の表面的な側面にばかり注目するのに対して、居住者は環境と、そこでのかれ自身の経験を連合させると述べた (Sparshott [1972], p. 15.)。(このよ

うな関係を Sparshott は self to setting と呼ぶのだが、Carlson はこれを参考にし、だれかの territory を適切に美的に鑑賞するためには、そこを貫く歴史や機能を理解する、すなわち自然科学や社会科学の知識を持つことが重要であると述べている (Carlson [2009], p. 81.)。)

②Yuriko Saito : Yi Fu Tuan のトポフィリア概念を取り上げ、知識ではなく愛着という観点から居住者の美的経験の固有性を語っている (Saito [2007], p.99)。

※ただし居住者の美的経験の特徴について、これ以上のことを論じている環境美学内の議論は管見の限りない。

・居住者の美的経験がそのほかの立場のひとつと違っているのは、Sparshott が言うように、その環境で多くの経験をしていること。だから Saito が言うように、愛着も芽生える。居住者と環境との関係は、日常的な生活のなかで築かれる。

・しかし、(直接に居住者の美的経験を批判しているのではないにせよ) 日常的な経験が美的経験である、ということに対してはさまざまな批判が寄せられている。その批判によれば、居住者の日常的な経験は「美的」経験とは呼べないか、よくて真剣さに欠けるものである。それらの批判のなかでも、とりわけ環境という観点から注目すべきと考えられるものを2つ取り上げる。

①〈美的経験の対象 object が不明確である〉(Irvin[2008]による整理)

ふつう、芸術作品から美的経験を得るときには、その源泉となる対象が存在している。そのため多くの美的経験論は、対象の存在を前提としている。ところが日常的な経験においては、なにが対象となっているのかが不明確。とくに、たとえばコップなどの道具ではなく、環境を美的経験の対象とする場合、不明確さは強まる。

②〈美的判断が欠けている〉(Cf. Dowling [2010])

たとえ居住者が感性を働かせ、美的経験をしていたとしても、その美的経験には美的判断が欠けているために真剣なものではないというタイプの批判を指す。美的判断が欠けているという批判は、美的判断なしでは美的経験が共有可能なものにならないため、批評的言説を成立させることがない、という見解に基づいている。

・以下ではそれぞれの批判のポイントを導き出し、応答を行う。

## 2.2 〈美的経験の対象が不明確である〉

※そもそも対象 **object** ということばの輪郭があやふやであること、また対象の有無は美的判断の客観性 **objectivity** の問題に結びつくことなど、気をつけなくてはいけないことがいくつかある。

・まず、本発表で言う「環境の美的経験」がどんなものを対象として想定しているのか整理。環境のなかから、一本の木、あるいは一つの大岩、一軒の住居を切り出し、美的な観点からみることは可能である。しかし、本発表で問題にしたいのは、ある環境を美的に経験するという事態である。たとえば桜上水駅を中心として広がる一帯において美的な経験をするとすれが、その「対象」はなにか、ということを一言で特定することは難しい。この場合、さまざまな要素が複合的に絡み合うことで美的経験の対象が構成されていると考えるべきであるが、ここでの問題はその「構成」がいかに行われるのか、ということである。

・芸術作品の場合、絵画であれば「美的経験の対象」は物理的存在者としての絵画と同定することが(ひとまずのところ)可能であるし、音楽に関しても特定の音の連なりと響きを「対象」として同定することが可能である。つまり、異論が生じる可能性もあるが、ひとまずのところ芸術作品の美的経験における対象は、程度の差こそあれ、いわゆる **object**、すなわち物理的実体を伴ったものの範囲におさまることが多いと言えるだろう(その物理的対象のどこに注目するのは個々の鑑賞者によって決定されるが)。

・ **Sherri Irvin** は、「かゆいところをかく **scratching an itch**」という極端な事例を持ち出すことで伝統的な美的経験論を揺さぶることを企図するが、その際、かれはこのかゆいところをかくという経験といわゆる美的経験としてすでに承認されている経験とを比べたとき、前者には対象がない、という特徴が浮かび上がり、まさしくそのためにかゆいところをかくという経験が伝統的な美的経験からはじき出されていると指摘している。**Irvin** によれば、こうした考えが蔓延する背景として、美的経験のような質的な経験 **qualitative experience** は、対象の持つ(あるいはそれに関連付けられる)美的性質について情報を与える **inform** ものだ、とう前提がある。

・ **Irvin** の戦略：かゆいところをかくような「基礎的な身体的経験 **basic somatic experience**」は、反省によって注意を向けられることで鑑賞可能な構造を構成するものとして考えられるようになる。これによって、この質的な経験それ自体が、美的評価の対象となる。

・彼女の言う反省 **reflection** は、もともとの経験を組織立てる作用を持つ。すなわち、確固たる対象がないところで生じた経験それ自体が美的評価の「対象」となるためには、そこに注意が向けられる必要があるということだ。

(※経験が対象、と言わなければならないのは Irvin が対象ということばをうまく使えていないせいかもしれない。)

・環境美学においても、環境という対象をどのように規定するのか、という問題は扱われてきた。

Hepburn[1966]:「フレーム」概念

絵画の額縁すなわちフレームは、絵画鑑賞においてわれわれが何に注目すべきなのか、その範囲を規定している。同様に、西洋音楽の伝統におけるコンサートホールのさまざまな慣習もまたかれによればフレームの一種であり、そこでの音楽鑑賞に際してわれわれが注意を向けるべきものを規定している。このように、いわゆる芸術作品の鑑賞に際して、われわれにはあらかじめフレームが与えられている。フレームとは、〈美的注意の向かう範囲を決定する装置〉であり、このフレームの内部に取り込まれるものこそが「美的経験の対象」であるということになる。

・これに対して環境とは自分自身そのなかにいるものであり、物理的には知覚可能な範囲を超えてどこまでも広がっていく。そこでわれわれは環境において、美的注意を向ける先を決めるフレームを自ら構成する (Cf. Stolnitz [1960])。

・Irvin の主張とこのフレーム概念とを突き合わせて考えてみる。Irvin は、日常的な経験に注意が向けられることによって、それ自体が美的評価の対象となると言った。経験自体が美的評価の対象となるという主張そのものにおける「対象」ということばの使い方には気になる点がないわけではないが、要点は連綿と続く日常のなかの一部を切り取ることで、その経験を対象化するという点にある。次に環境美学におけるフレームは、物理的にどこまでも広がり、かつ時間をまたいで変化しつつも存在する環境の一部を切り取ることで、美的注意の向かう対象を決めるもの。このことから、居住者の日常的な美的経験の対象を明確化することは、この選定の際に、何が対象として取り込まれるのかを明らかにすることである。

・居住者の対象選定

①時間経過と増幅的想像力 *ampliative imagination* : 毎日同じ道を通り通勤する場合、毎日逐一その道沿いの街路樹を注意深く眺めるようなことはしないかもしれないが、ある日その樹に新芽が芽吹いていることに気づく。この新芽に春の訪れを感じ、新鮮さを含んだ快の感情を抱く。このとき、たしかにこの美的経験は、目の前の新芽によって引き起こされている。しかしそこから敷衍して、それ以前の年に見た花咲く樹の姿などが目に浮かび、さらなる快を感じる。

…増幅的想像力 (Brady [2003], pp. 156-157.):「増幅的想像力は高められた創造的な力と、自然の事物に対する反応における特別な好奇心によって特徴づけられる。ここでは、想



像力は知覚において与えられたものを増幅させ、事物に対するイメージのたんなる投影を抜け出ている。この活動はそれゆえより鋭敏で、事物のより深い想像的取り扱いに結びついている。」

…ブレイディによれば、この想像力は自然物や環境の持つつかのまの性質 *temporal quality* に対して敏感。移り変わっていく環境のすがたを楽しむことはわれわれにとってごく身近な経験であり、それを可能にしているのは想像力のはたらき。このときわれわれの想像力が増幅しているのは「知覚において与えられたもの」であるが、これによって結果的に、美的経験の対象は、目の前の光景の現在のみならず過去の姿でもあることになる。つまり、物理的な事物の、一定の幅を持つ時間的部分が美的経験の対象となっている。

②「活動の美学 *aesthetics of doing*」：このトピックは日常美学においてしばしば言及されており、Yuriko Saito は鑑賞者の態度と活動者の態度を対比させつつ、対象を外側から鑑賞するのではなく、主体の活動そのものが美的経験となる事態について考察している（彼女が挙げる例は洗濯など）。活動の美学が伝統的な美学の枠組みからはじき出された理由を Saito は大きく分けて3つ挙げているが、そのうちのひとつが〈明白な対象がない〉ということである(Saito [2017], p. 54.)。

…Saito の事例：洗濯…洗濯をするときのあたたかい水の手触り、規則正しく干していくことの心地よさなどが洗濯を美的経験の一種にしうる。

※Saito は伝統的に「女性」の仕事とされてきた家事に注目することで、フェミニスト的な観点から美学にアプローチすることを意図している。

→Saito は活動そのものが美的経験であるという言い方をするが、しかしこれは主体の積極的な活動を契機として、対象を見出している、というふうにも解釈できる事例（洗濯という活動をすることで、水の手触りや、規則的に並んだ洗濯物に注意が向かうので）。

…より環境にフォーカスする事例に敷衍する：居住地における活動のうち、美的経験に発展しそうなものとは？

★考えられる事例：

パターン 1 居住者は自宅の庭いじりから地域の美化運動や公園清掃まで、さまざまなかたちで居住地となっている環境に対して大小さまざまな改変を加えていく。この種の活動においてひとは、鑑賞者というよりも制作者的態度で環境に接している。この環境においてどのような樹木が必要なのか、熟考しつつ選択していくプロセスには、美的な側面がある。その決定の際にわれわれは、単に論理的な判断や実利的な判断をするのみならず、感性を中心として決定を下していくのだし、この決定をするプロセスのなか

で、現状と完成予想図を比較検討しながら、当該の環境をよりつぶさに見るようになる。またたとえば、植えられる植物の美的な側面にも目を向けるようになる。

パターン 2 比較的、非日常的な経験である祭りへの参加も、居住者に固有の対象化がある。祭りは居住者にとっても非日常的なものであるが、しかし非居住者が同じ祭りを「観に来る」場合とは違う美的経験になる。継続的に同じ祭りに参加することで、使用される神輿など各要素に感じる新奇さは減じていく。しかし、神輿をかついで練り歩く街並みの変化あるいは変わらなさに目が向き、そこに快を感じたり、酌み交わす酒のおいしさに快を感じたりするかもしれない。このとき祭りへの継続的な参加が、美的経験の対象を拡大している。

※このような仕方で美的経験の対象が選定されているために、Tuan と Saito が主張するように、居住地に対する愛着 **attachment** のようなものが生まれるのだと言えるだろう。

### 2.3 〈美的判断が欠けている〉

・美的判断は、美的経験にもとづいて対象についての評価。Christopher Dowling は、Irvin の〈かゆいところをかく、というような経験も美的経験になりうる〉という主張を批判する。Dowling に言わせれば Irvin のように、美的判断によって形成される批評的言説を欠いたような経験まで「美的」と形容することを批判(Dowling [2010])。

・こうした批判に対して、日常美学論者たちのあいだでは、むしろ美的判断が伴わないような美的経験について語ることの意義を強調する（美的経験の現象学的記述）(Saito [2017], Melchionne [2011])。しかし、たとえば Saito は美的経験としての洗濯を分析する際、ひとつのソースとして Cheryl Mendelson という学者兼エッセイストの選択に関する文章を取り上げ、彼女の語る洗濯にまつわる美的快を分析している。Mendelson はおそらく、洗濯をするときに感じていた心地よさ（布のさわり心地、あたたかい水などを要素として持つ）を、文章を書くときにひとつひとつ思い起こし、これに対して美的な用語で価値評価をしていったのだろう。Saito は、分節化されていない美的満足がわれわれの生活の中に埋め込まれていること、すなわち美的判断を伴わない美的経験が日常にあふれていることを強調するが、第三者による美的経験のレポート自体はひとつの美的判断を示している、と言えるのではないか。

・美的判断を伴わない美的経験はない、という主張を積極的に擁護するつもりはないが、しかし少なくとも美的経験と美的判断の関係を考え直すこともまた〈美的判断が欠けている〉という日常的な美的経験に対する批判に応答するためのひとつの方法。

・ここで参考になりそうなのが Schellekens [2006]。彼女は美的判断の客観性を擁護する際に、美的知覚のみを根拠とする立場を見直す。美的判断とは、美的性質をまず知覚し、その理由（＝非美的性質）を特定するためにさらに注意深く対象をみることを経て、自身の美的知覚についてレポートすること。つまり彼女は、通常「美的経験」としてひとつに括られる経験を、知覚と判断の段階に区切っている。

・ Schellekens をヒントに居住者の美的判断について言えること：Dowling の批判は、美的判断を伴わない経験は、美学の領域では扱えないというもの。これに対して Saito らは判断志向の美学そのものの限界を指摘。しかし Schellekens の議論を踏まえれば、居住者の美的経験にはあとから美的判断を付け加えられる可能性がある（これは Schellekens による知覚と判断の分離をよりラディカルにしたもの）。芸術作品や観光地を前にするとき、ひとはこれらについて感想を述べることをたのしみのひとつとして据えているため、美的判断をする準備が整っている。これに対して、居住地は日常の一部であり、そのためそこの経験を言語化し、美的判断のかたち仕立てあげてをひとはなかなかしない。

・つまり居住者にはそもそも美的判断を（意識的に）行う機会が欠けているが、この種の機会を与えられればかれらはふだんの美的経験を元に、居住地に対して美的判断を下すことができるのではないか。

事例①吉永[2014], pp. 179-284. : 吉永明弘が挙げている、都市工学者斎藤伊久太郎の取り組み。斎藤は千葉市において、市民数名に市内のまちあるきをさせ、自分が快いと感じる場所とそうでない場所に地図上でしるしをつけさせた。そのうえで住民同士に、なぜそのような判断をしたのか、ということの説明するように求めた。そこで参加者たちは互いにその判断の理由を教え合うことで、他者の見方を取り込むだけでなく、自身の経験を言語化し、伝える経験を積んだという。

事例②奥能登国際芸術祭（石川県珠洲市、2017年）での聞き取り：芸術祭というイベントが行われることで、ふだんよりもずっと多数の外部の人々が来るようになった土地。居住者の一部は、観光者やアーティストに対して土地の魅力を伝えようとし、そこで日々の生活を顧みて、ことばにする経験を持ったという。

### 3. まとめ

・居住者と観光者の美的経験について論じてみることで、考える余地があることが分かったトピック。

### ①美的経験の対象

- ・環境における美的経験の対象選定の幅
- ・環境の形式に対して与えられる内容の多様性と、それぞれの内容がもたらす美的経験の内実

### ②美的経験と美的判断の関係

- ・美的経験と美的判断の分離
- ・自分がした美的判断相互の関係

### 参考文献

- Brady, Emily. 2003. *Aesthetics of the Natural Environment*. Tuscaloosa: The University of Alabama Press.
- Carlson, Allen. 2009. *Nature and Landscape: An Introduction to Environmental Aesthetics*. New York: Columbia University Press.
- Dowling, Christopher. 2010. "The Aesthetics of Daily Life." *British Journal of Aesthetics* 50 (3): 225-242.
- Haapala, Alto. 2005. "On the Aesthetics of the Everyday: Familiarity, Strangeness, and the Meaning of Place." in Andrew Light and Jonathan M. Smith (eds.) *The Aesthetics of Everyday Life*. New York: Columbia University Press. 39-55.
- Hepburn, Ronald. 2004 [1966]. "Contemporary Aesthetics and the Neglect of Natural Beauty." in Peter Lamarque and Stein Haugom Olsen (eds.) *Aesthetics and the Philosophy of Art—The Analytic Tradition: An Anthology*. Oxford: Blackwell Publishing, 521-534.
- Irvin, Sherri. 2008. "Scratching an Itch." *The Journal of Aesthetics and Art Criticism* 66 (1): 25-35.
- Melchionne, Kevin. 2011. "Aesthetic Experience in Everyday Life: Reply to Dowling." *British Journal of Aesthetics* 51 (4): 437-442.
- Saito, Yuriko. 2007. *Everyday Aesthetics*. Oxford: Oxford University Press.
- . 2017. *Aesthetics of the Familiar: Everyday Life and World-Making*. Oxford: Oxford University Press.
- Schellekens, Elisabeth. 2006. "Towards a Reasonable Objectivism for Aesthetic Judgements." *British Journal of Aesthetics* 46 (2): 163-177.
- Sparshott, F. E. 1972. "Figuring the Ground: Noted on Some Theoretical Problems of the Aesthetic Environment." *The Journal of Aesthetic Education* 6 (3): 11-23.
- Stolnitz, Jerome. 1960. *Aesthetics and Philosophy of Art Criticism*. Boston: Houghton Press.
- 津上英輔『あじわいの構造 感性化時代の美学』、春秋社、2010年
- 吉永明弘『都市の環境倫理 持続可能性、都市における自然、アメニティ』、勁草書房、2014年